

女性史・ジェンダー史の成果が豊かに盛り込まれた教科書

Yokoyama Yuriko

横山 百合子

“まるで教科書みたい”といわれるように、教科書は「無味乾燥」で「おもしろくない」ことの代名詞となっているのが現状です。しかし、学び舎の教科書は、このような先入観を根本からくつがえし、思わず読みふけてしまう魅力を持っています。子どもたちが「え、なぜ？」と考えたくなる、歴史的思考の喚起力にあふれた素材、近現代史の重視、読みやすい本文、動物や学校、子どもといった身近な切り口から問いかけていく姿勢など、その魅力はいくつもありますが、女性史・ジェンダー史の研究成果が豊かに盛り込まれていることも、魅力のひとつといえるでしょう。

“決断”の教科書

「バスチーユを攻撃せよ—フランス革命—」という見開きのページを見ると、フランス革命において、人権宣言が発表され王政が廃止された後、国民の政治参加が認められたにもかかわらず、女性や植民地奴隷の人権は認められなかったことがわかりやすく書かれています。このような、フランス革命の達成とその歪みをトータルに見る見方は、国内外を問わず、歴史研究者のなかではすでに常識となっています。しかし、「女性の権利宣言」を書いて女性の人権の不在を批判したオランプ＝ド＝グージュと、奴隷解放によって史上初の黒人共和国を建てたトゥサン＝ルベルチュールを、本書のようにフランス革命全体の構造のなかで生き生きと描いた教科書は、まだ見当たりません。最も詳しい高校世界史教科書には、いまだグージュの名前も、女性の人権が認められなかったことも書かれていないのです。学び舎の教科書は、“教科書の常識”にとらわれず、それが子どもたちの未来にとって大切な内容であれば、歴史学の成果をふまえてわかりやすく書くという姿勢に貫かれています。まさに、学問の成果と授業実践をふまえて取捨選択する“決断”の教科書といってもよいでしょう。

ジェンダー視点からの斬新な構成

また、斬新さに驚いたのは、第8章「帝国主義の時代」でした。第8章の扉は、2ページ見開きで、纏足やベール、窮屈な帯やコルセットを解き放って、政治的・社会的進出を果たす帝国主義時代の女性たちの姿が、衣服の変化によって興味深く示されています。一方、ページをめくっていくと、兵士とそれを不安げに見送る家族の図に「WOMEN OF BRITAIN SAY—GO!」と記した第一次世界大戦中のポスターも現れます。女性の政治・社会への進出と女性の戦争への動員は歩調をそろえて進み、最終的に、兵士だけでなく国民全体が「多くの破壊と死」にさらされていくことが、章全体からわかりやすく読み取れる構成といえるでしょう。扉にかかれた「困難な時代に生きた人びとの声や体験から学びましょう。戦争は、人類に何をもたらしたのでしょうか」という問いにたいして、ジェンダーの視点から深く考えられるよう、実によく工夫された構成です。

躍動する女性を描く

学び舎の教科書では、全体の約半分にあたる61項目を近現代史に割いていますが、そのなかで女性について言及がないページはわずかです。前近代においても、卑弥呼や北条政子はもちろん、日本で初めての留学生は尼であつたこと、多種多様な職業をになう中世の女性たちの姿、一揆に立ち上がる女性など、どの時代においても、働き、学び、暮らし、憩う女性たちの姿が鮮やかに浮かび上がってきます。現在の高等学校日本史教科書でさえ、女性についての記述は全体の3%に満たないのが現状です。歴史の半分を支えた女性の姿を、事実に基づいてこれほどゆたかに躍動的に描く教科書の登場は、初めてのこと。中学生だけでなく大人にとっても、読み応えのある教科書です。